ODYSSEUS 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 紀要　第 27 号（2022 年）、2023 年 3 月、pp. 19–41

近代インドのベネ・イスラエル知識人とシオニズム
――インドのユダヤ・コミュニティからみたパレスチナ――

井 坂 理 穂

はじめに[1]

本稿は、インド西部に在住する「ベネ・イスラエル（Bene Israel）」と呼ばれるユダヤ・コミュニティに属する人々が[2]、1920–50 年代の大きな政治・社会変動のなかで、このコミュニティの起源や歴史をどのように表し、彼らとインド、パレスチナ/イスラエルとの関係をいかなるかたちで捉えていたのかを、レベッカ・ルーベン（Rebecca Reuben, 1889–1957）という女性知識人の議論に焦点を当てて考察するものである。

ベネ・イスラエルは、彼ら自身の伝承によれば、古代イスラエルの「失われた 10 部族」に属する人々を祖先にもつ。紀元前にインド西部のコーンカン地方に漂着し、7 名の男女が生き残ったとされている。伝承がさらに語るところでは、彼らやその子孫たちは、インドに定着する過程でユダヤ教の教えや慣習の多くを忘却し、ヘブライ語も忘れ、現地の言葉を話すようになるのだが、ユダヤとしての慣習の一部は彼らの生活のなかに残存していたとされる。それらの慣習が手がかりとなって、のちに外部からこの地を訪れた「ディヴィド・ラハビ」という名で知られる人物が、彼らがユダヤであることを発見し、彼らの間にユダヤとしての意識を呼び起こしたとされている。ただし、この「ディヴィド・ラハビ」がいつ、どこからやってきたのかについては諸説が存在する[Roland 2018: 12–13]。

いずれにしても 18 世紀には、インド西部のユダヤ・コミュニティの存在が他地域でも知られるようになる。彼らはこのころから、インド南西部のマラバール海岸に住むコーチン・ユダヤや、ヨーロッパからやってきたキリスト教宣教師との交流を通じて、ユダ

1　本稿は、JSPS 科学研究費・基盤研究（C）「近現代インドのユダヤ教徒のライフ・ヒストリーと「国民国家」」（課題番号 18K00988, 代表者：井坂理穂、2018 年度–2022 年度）の助成のもとで行われた研究の成果の一部である。本調査の過程では、レベッカ・ルーベンの姪であり、自身も教育活動に長年携わられ、本論文の参照文献に含まれる複数の文献を出版されているニーナー・ハイームス氏から、数々の貴重な情報をいただいた。改めて感謝の意を表したい。

2　「ベネ・イスラエル」（英語読みではベネ・イズラエル）の名称の英語綴りやマラーティー語綴りには複数のものがあり、それに応じてカタカナ表記も複数の可能性があるが、ここでは読みやすさやわかりやすさを考慮し、「ベネ・イスラエル」に統一する。異なる表記の可能性については、井坂[2021]末尾の注 1 を参照。

ヤの歴史や文化に関する知識を習得していった[3]。さらにイギリス植民地支配が拡大すると、彼らのなかからは、植民地政府の軍隊に入ったり、宣教師による教育活動や植民地政府の導入した教育制度のもとで、英語を習得し、官僚職や専門職に就くなどして経済的・社会的地位を上昇させる人々も現れる。またこの時代には、教育や就職の機会を求めて、ベネ・イスラエルの人々が次々に農村部から都市部、とりわけボンベイへ移住している[井坂 2021]。

植民地期インドのユダヤ人口は、1931 年センサスの時点で 24,141 人であり、インドの総人口からすればユダヤは「とりわけ小さなマイノリティ（microscopic minority）」に過ぎなかった。しかしその一部は上記のような植民地政府との結びつきを背景に、エリート層として一定の存在感を示すようになる。当時のインドのユダヤ人口は、ベネ・イスラエルの他に、18 世紀以降にインドにイラク、シリア、イランその他から移住し、ボンベイやカルカッタなどに主に居住していたバグダーディー・ユダヤ、古代にインドに到来したとされるインド南西部のコーチン・ユダヤなどからなっており[4]、ベネ・イスラエルはこのうちで最も人口の多いコミュニティであった。これらの異なるユダヤ・コミュニティはそれぞれ独自の歴史、言語、文化をもちつつ、都市部を中心に一定の接触、交流を続けていた。しかしこうした交流においては、その出自の曖昧さや現地化された慣習を理由として、ベネ・イスラエルがその他のユダヤ・コミュニティから差別的な対応を受けることもあった[井坂 2021: 159]。このことは、植民地期のベネ・イスラエル・エリートの自己認識や自己表象のしかたにしばしば影響を与えている。すなわち彼らの間からは、こうした状況を意識しながら、自分たちの出自の「正統性」を様々なかたちで主張する議論が繰り返し出されている。

本稿は冒頭で述べたように、植民地期にベネ・イスラエル・エリートの家に生まれた女性知識人、レベッカ・ルーベンの生涯を追うとともに、彼女の著述に描き出されたベネ・イスラエルの歴史や、ベネ・イスラエル・コミュニティとインド、及びパレスチナ/イスラエルとの関係を、その通時的変化にも留意しながら分析するものである。20 世紀前半のベネ・イスラエルは、インド・ナショナリズムの台頭、欧米におけるシオニズムの台頭、1930–40 年代のヨーロッパからインドへのユダヤ難民の流入、1947 年のインド・パキスタン分離独立、さらに 1948 年のイスラエルの建国宣言など、大きな政治・社会変

---

3 キリスト教宣教師らによるベネ・イスラエルに対するヘブライ語教育については、Numark[2012]を参照。

4 この他にヨーロッパから移住したユダヤも存在する[Robbins and Tokayer 2013; Weil 2020]。さらに独立後のインドでは、ユダヤの出自を新たに主張するようになった人々がインド北東部やアーンドラ・プラデーシュ州などに現れている。なお、イスラエル建国後にインドからイスラエルへの移住の波が続いたことから、インドのユダヤ人口は大きく減少し、2011 年センサスの時点では 4,429 名となっている[*Census of India* 2011]。ただしインド北東部においてはユダヤ人口は増加しており、2011 年センサスにはマニプル州で 2,032 名という数字が記されている。

動に次々と対峙することになる。彼らは、これらの変動にいかに対応していくべきかを模索するとともに、自らの帰属意識のあり方やインドにおける位置づけを再構築していく。

レベッカ・ルーベン（以下、レベッカ）に関しては、彼女の姪であるニーナー・ハイームス（Nina Haeems）が、レベッカ自身の書簡やエッセー、レベッカと交流のあった人々が記した彼女に関するエッセーその他をまとめた書籍を出版している[Haeems 2000]。ハイームスはまた、ベネ・イスラエル女性たちのエッセーや、インタビューによって得られた彼女たちの語りを収録した書籍の編集にも携わっており[Haeems 2002; Haeems and Haeems 2014]、これらのなかにもレベッカに関する記述が含まれている。また、レベッカがベネ・イスラエル・コミュニティやその歴史をどのように語っていたのかについては、彼女がケンブリッジで行った講演を刊行した『ボンベイのベネ・イスラエル』（1913年）[Reuben 1913]や、彼女が編纂した『ベネ・イスラエル年報』などが手がかりとなる[Reuben 1917; 1918; 1919–20]。彼女の諸活動については、インドを訪れたシオニストの記録や、当時の新聞からも断片的な情報を集めることができる。

植民地期から独立前後のインドにおけるベネ・イスラエルの歴史については、J・ロランド、S・R・アイゼンバーグらによる詳細で実証的な研究があり[5]、これらのなかでもレベッカは、この時代のベネ・イスラエルの代表的知識人として取り上げられている[Isenberg 1988; Roland 2018]。しかしそこでは、レベッカの教育・社会活動の概要については触れられているものの、彼女が当時の社会や自らの属するコミュニティのあり方をどのように考えていたのかについて、彼女自身の著作に基づく具体的な分析は行われていない。本稿は、資料面で不十分な部分を残しながらも、ベネ・イスラエル知識人たちの帰属意識や国家との関係をめぐる模索を、個人史を手がかりに考察する試みの一端として提示するものである。

1. レベッカ・ルーベンの生涯

レベッカ・ルーベンはベネ・イスラエルの両親のもとに1889年9月18日、マイソール藩王国のシモガにある母方の祖父の家で生まれた[Haeems and Haeems 2014: 245]。彼女の母方の祖父は、1871年にベネ・イスラエル出身者のなかで初めて大学を出た人物として知られ、マイソール藩王国で技師の職に就いた。レベッカの父エズラ・ルーベンは、法学士の資格を取得し、ジュナーガド藩王国の司法官を務めている[Ezekiel 2000: 43–44]。このようなエリート家庭の長女として育ったレベッカもまた、プネー、ボンベイで高等

[5] これらの他にも、ベネ・イスラエルを対象とした歴史学・社会学・文化人類学の分野での研究は、英文では数多く出版されている。先行研究の紹介については[井坂 2021]末尾の注3を参照。

教育を受け、さらにイギリスに留学したのち、インドに戻り教育者としての道を歩んでいる。なお、レベッカには3人の弟がいたが、そのうちのひとりディヴィドは、ケンブリッジ大学で学位を取得したのち、インド高等文官の地位に就いた[Ezekiel 2000: 44]。レベッカの妹ふたりも大学の学位を取得している。1901年センサスの段階で、女性識字率が1パーセントに満たないというインドの状況のなかで[Risley and Gait 1903: 104–105]、レベッカたち姉妹の学歴の高さは際立っている。

レベッカは8歳のときから、プネーにある「フズールパーガー（Huzurpaga）」の名称で知られる女子校（ボンベイ大学要覧には「現地民女子のための高等学校（High School for Native Girls）」の名で記載されている）で寮生活を始め、大学入学資格試験を受験できる段階まで同校で学んでいる[*University of Bombay, The Calendar* 1906; Israel 2000: 3]。1884年に創設された同校には、レベッカをはじめ、ベネ・イスラエルの子女が多数入学しており、ベネ・イスラエル出身の教員も多かった[Corley 2002: 143]。レベッカはここで、この地方の言語でありベネ・イスラエルの多くが母語とするマラーティー語に加えて、英語、サンスクリット語を学んでいる。また、休暇中に父親に教わりながら、ヘブライ語の学習も進めており、大学入学資格試験の際にはヘブライ語を試験科目のひとつとして選択している[Haeems 2000: xx; Israel 2000: 3]。1905年、レベッカは同試験を首席で合格し、注目を集めた。その優秀な成績のために複数の奨学金・賞金を授与されるのだが、そのうちのひとつはヘブライ語で最も優秀な成績を収めた者に授与されるディヴィド・サスーン・ヘブライ語奨学金であった。これはかつて1881年に、レベッカの父親も獲得した奨学金である[*University of Bombay, The Calendar* 1906: 328, 460]。ベネ・イスラエルの間でも、日常生活で用いることのないヘブライ語を学ぶ者はごく一部に過ぎなかったが、レベッカは学生時代から一貫してこの言語とのつながりを重視しており、のちにはベネ・イスラエルの人々にヘブライ語教育を広めることにも関心を向けている。

入学資格試験に合格したレベッカは、ボンベイ大学傘下にある複数のカレッジのうち、初めはボンベイのエルフィンストン・カレッジで学ぶが、のちにプネーのデカン・カレッジに籍を移し、1910年に学位を取得する [*University of Bombay, The Calendar* 1908: 378; 1910: 337]。カレッジ卒業後、一時はプネーにある母校、フズールパーガーで教鞭をとるが、1911年からはイギリスに留学し、ロンドン大学の傘下にあるマリア・グレイ・カレッジの教員養成ディプロマ・コースで学ぶ[Isenberg 1988: 209; Israel 2000: 4]。1913年には短期間ではあるが、ケンブリッジ大学のイズラエル・エイブラハムス博士のもとでヘブライ語を学ぶ機会も得ている[Haeems 2000: 85–86]。彼女はこのとき、同大学の学生たちの招きで、ベネ・イスラエル・コミュニティについての講演も行っている。この講演はまもなく『ボンベイのベネ・イスラエル』というタイトルの小冊子としてケンブリッジ大学出版局から刊行された[Reuben 1913]。

1913年にインドに帰国したレベッカは、教育活動に尽力する。プネーのフズールパー

ガー、同じくプネーにある女性師範カレッジ付属校、バローダーの師範カレッジの教職や管理職を務めるが、1922 年にボンベイのイスラエル・スクール（Israelite School）の校長の座に就き、この職を 1950 年に引退するまで務めることになる[Haeems 2000: xxiv–xxvi; Israel 2000: 4–5]。すなわち、30 歳台前半から 60 歳過ぎまでの 30 年間近くを同校で過ごしたことになる。イスラエル・スクールは、ベネ・イスラエル出身で、軍の組織に勤務したこともある H・S・ケーヒームカル（Haeem Samuel Kehimkar, 1830–1909)によって、ベネ・イスラエル子弟のための教育機関として 1875 年にボンベイに設立された。その経営は多方面からの寄付に依存していたが、とりわけロンドンのアングロ・ユダヤ協会から多くの財政支援を受けている[Divekar 2014: 113–116; Kehimkar 1937: vi; Reuben 2000a: 110]。1892 年までには大学入学資格試験の受験が可能なレベルまでを扱う高等学校に発展している[Divekar 2014: 115; Reuben 1917: 53]。同校は、植民地支配下で導入された教育制度に則ったかたちで初等教育から高等教育までを扱うとともに、ベネ・イスラエルのための独自の機関として、ユダヤ教やヘブライ語を教えることをも目的としていた[Reuben 1917: 52]。

イスラエル・スクールは共学校であったが、レベッカの着任当時は女子学生はほとんどおらず、ほぼ男子校といってもよい状態であった。レベッカはのちに記したエッセーのなかで、この学校の校長職に就くことを決めたときの家族の反応を振り返っている。共学校での勤務に反対する母親や祖父母に対して、父親だけは、レベッカならば職務を果たせるとして彼女を励ましたのであった[Reuben 2000b: 103–104]。校長時代のレベッカは、常に質素な白いサリーを着用していたことで知られている[Chincholkar 2000: 117; Haeems 2000: xxvi]。同校は現在も存続しているが（ただし現在はユダヤ・コミュニティ以外の出身の学生が大半を占めている）、その校舎に掲げられている肖像画においても、レベッカは白いサリー姿で描かれている。学校の経営をめぐる内部対立に苦慮しながらも、レベッカは長年に渡り校長として同校の教育・経営に携わり続けた[Haeems 2000: xxxi]。

レベッカが着任した当時、同校の財政状況は逼迫しており、とりわけ老朽化した校舎の建て直しのための資金調達が課題となっていた。1925 年にレベッカはロンドンのアングロ・ユダヤ協会を訪問し、資金提供についての同意を取りつける。また 1928 年には、ボンベイに立ち寄ったバグダーディー・ユダヤ出身の資本家、エリー・カドゥーリー卿から、1 万ポンドを超える多額の資金提供を受ける[Chincholkar 2000: 117–118; Reuben 2000a: 111]。1934 年に新校舎が設立されると、同校は寄付者の名前にちなみ、エリー・カドゥーリー卿スクール（Sir Elly Kadoorie School）と改名された[Haeems 2000: xxvii]。レベッカのもつグローバルなユダヤ・ネットワークとのつながりが、学校経営に寄与していたことがうかがえる。

イスラエル・スクールでの教育活動と並行して、レベッカはベネ・イスラエル・コミ

ュニティのための様々な社会活動にも関与している。1913 年には、レベッカのいとこで医学を学ぶジェルーシャ・ジラド（Jerusha Jhirad, 1891–1984）[6]とともに、ベネ・イスラエル女性協会（Bene Israel Stree Mandal）を立ち上げた。同協会は女性たちのために、講演の組織、縫い物や英語の授業の開講、図書館の開設などを行うが、レベッカはここでも教育者として活動している[Haeems 2000: xxviii–xxix; Reuben 1917: 55]。また、1917 年にベネ・イスラエル会議（Bene-Israel Conference）が組織された際には、その運営委員会に名前を連ねている[Moses 1918]。1925 年には、ジェルーシャ・ジラドによってユダヤ宗教連合（Jewish Religious Union）が設立されるが、レベッカはこのときも設立時から組織に参加している。ユダヤ宗教連合は、ユダヤの慣習の近代化・改革を促すことを目的とした組織であり、1926 年にロンドンで進歩的ユダヤ教世界連合（World Union for Progressive Judaism）が創設されると、その創立メンバーのひとつとなった[Isenberg 1988: 235–236]。レベッカはこれらの他にも、ボンベイ管区（のちにボンベイ州）を中心として各種の社会・教育組織の活動に携わっている[Haeems 2000: xxxiv–xxxvi; *The Times of India,* 18 June 1928: 15; 24 February 1931: 3]。さらに 1920 年代以降は、インドを次々に訪れる海外からのシオニストたちとの交流において、中心的な役割を果たすのだが、これについては第 3 節で取り上げる。

これらの教育･社会活動と連関して、レベッカは文筆活動にも精力的に携わっている。1910 年代終わりには『ベネ・イスラエル年報（Bene-Israel Annual and Year Book）』を編纂し、そのなかでベネ・イスラエルに関する豊富な情報をまとめている[Reuben 1917–20][7]。この年報にはレベッカ自身が執筆したエッセーも含まれており、そこではベネ・イスラエルの歴史や同時代のベネ・イスラエルの状況が論じられ、ユダヤ教、ヘブライ語、ユダヤの歴史や文学、儀礼などの知識を深めることが呼びかけられている[Reuben 1919-20: xii–iii]。レベッカはこれらの知識をコミュニティ内に広めるうえで、学校やシナゴーグの果たす役割ばかりでなく、家庭における母親たちの役割の重要性も強調している。その後、1927 年からの数年間は、ベネ・イスラエルの子どもたちを対象としたマラーティー語月刊誌『ミツバチの巣（Nofeth）』を発行する[Haeems 2000: xxii; Isenberg 1988: 239]。同誌には、旧約聖書やユダヤの歴史に基づく物語、寓話や説話、謎解き、天文学についての記事などが掲載されていた。

レベッカの著作の多くは、教育・社会活動の場合と同様に、ベネ・イスラエル・コミ

---

6 ジェルーシャ・ジラドはボンベイのグラント・メディカル・カレッジで学び、医学の学位試験を首席で通過したのち[*University of Bombay, The Calendar* 1914: 470]、奨学金を得てイギリスに留学し、1919 年にロンドン大学の医学博士の学位を取得した。帰国後はデリー、バンガロールなどで勤務したのち、1925 年からボンベイのカーマー病院で女性のための医療活動に携わった。詳細については、Jhirad [1990]他を参照。

7 この年報には、ベネ・イスラエルによって出された出版物の網羅的なリストも載せられている [Isenberg 1988: 94, 355–367]。

ュニティを対象としたものとなっている。ただし晩年には、ボンベイ州で使用される学校教科書の執筆にも携わっていた。それは、1950 年代にボンベイのマクミラン社から出版され、『アショーク読本（Ashok Readers）』シリーズの名称で広く知られている英語教科書である。この読本は、ボンベイ州内で英語以外の言語を媒介として授業を行う学校において、第 8 学年から第 10 学年に在籍する生徒が英語を学ぶ際に用いる教材として刊行された[8]。同シリーズは、ボンベイ州の教科書選定委員会によって選出され、1965 年まで版を重ね、広範な読者を獲得している[Haeems 2000: 11, 240–242]。同じころに、レベッカはマクミラン社が出版した英語文法書の執筆にも携わっている。

レベッカは生涯独身であったが、彼女の姪にあたるニーナー・ハイームスやサラ・イスラエルが記したレベッカについての回想からは、家族の成員間の活発な交流の様子がうかがえる。晩年、結核性心膜炎を患い、さらに心臓発作に見舞われたレベッカは、1957 年 11 月 16 日に 68 歳でその生涯を閉じる[Israel 2000: 9]。その 4 日後、エリー・カドゥーリー卿スクールでは全校生が参加するかたちで故人を偲ぶ会が設けられた[Haeems 2000: 132]。

2. ベネ・イスラエルの歴史を語る

次に、レベッカがベネ・イスラエル・コミュニティの起源や歴史、現況について、どのように理解していたのかを、彼女自身の著作に基づいて考察する。本節では、1913 年にレベッカがケンブリッジ大学の学生たちの招きに応じて行った講演を出版した冊子、『ボンベイのベネ・イスラエル』を中心に検討する。

彼女はこのなかで、まずはじめに、ベネ・イスラエルをインドの他のユダヤから明確に区別することが必要であると説く。そして、インドにおける他のユダヤ・コミュニティとして、ヨーロッパ出身のユダヤ、「ヤフーディー」（ここでレベッカは、バグダード、エルサレム、パレスチナ、ペルシアからやってきたユダヤを指すものとしてこの言葉を用いている）、コーチン・ユダヤの 3 つを紹介したうえで、ベネ・イスラエルをヤフーディーやコーチン・ユダヤから区別するように注意を促している [Reuben 1913: 1]。さらにレベッカは、もうひとつの集団として「カーラー・イスラエル（Kala Israel, 「カーラー」は「黒い」の意）」、もしくは「黒いユダヤ（Black Jews）」と呼ばれる人々が存在することに言及する。この言葉はレベッカによれば、コーチン・ユダヤやベネ・イスラエルのなかで、混血の祖先をもつ人々や改宗者たちを指すのに使われていた。したがって、この「黒」は色そのものを指すわけではないのだが、インドの外からやってきた人々が、

---

8 当時、ボンベイ州において、英語以外の言語を教授言語とする学校では、英語の授業は第 8 学年から始められた[Haeems 2000: xxxv, 240–242]。なお、「アショーク」というのは、このシリーズのなかに登場する主人公の名前である。

相対的にヤフーディーがベネ・イスラエルよりも肌の色が白いことから、前者を「白いユダヤ」、後者を「黒いユダヤ」とみなしていることに対して、レベッカは強い反発を示している[Reuben 1913: 2–3]。

次にレベッカは、ベネ・イスラエルの歴史を振り返る。ここで彼女が語る歴史像は、本論文の冒頭で紹介したような、現在においても広く聞かれる伝承の内容と重なっている。ディヴィド・ラハビの出自やインド到来の時期については現在においても諸説があるのだが、レベッカはここでは彼を、10 世紀初めにインド西部の海岸部を旅していたコーチン・ユダヤとして描いている。そこでは、彼がこの地で、「土曜日の油絞り」と呼ばれる農民コミュニティのことを知り、彼らに関心をもち、さらに調べていくうちに、このコミュニティがユダヤであるとの結論に達したという、よく知られている伝承が綴られている。なお、「土曜日の油絞り」の名称は、彼らが土曜日に仕事を休む習慣をもつことからつけられた名前であるといわれている（土曜日はユダヤの安息日にあたる）。レベッカの記述では、このコミュニティはすでにこの時点で自分たちを「ベネ・イスラエル」と呼んでいたとされている[Reuben 2013: 3]。また、ここではラハビの到来以前においても、コミュニティの間でユダヤの信仰や慣習が継承されていた面が意識的に強調されている。こうした特徴は、彼女が後に執筆した「宗教の再編成（Religious Reoganisation）」というエッセー（『ベネ・イスラエル年報』所収）において、より明確に現れている[Reuben 1919–20: xii–liii]。このエッセーでは、ディヴィド・ラハビが行ったことは[9]、「ベネ・イスラエルを改めてユダヤに引き戻す」ことではなく、彼らの間に存在するユダヤ教のあり方を「改革」したことであると位置づけられている[Reuben 1919–20: xiv][10]。また、ディヴィド・ラハビの来訪がベネ・イスラエルの歴史上で記念すべきできごとであるのは、「一般に考えられているように、彼らを父祖の宗教に引き戻したため」ではないとの主張が展開されている。なぜなら、彼らは父祖の宗教を失ったことは一度もなかったから、というわけである[Reuben 1919–20: xiv]。レベッカの考えでは、ラハビがベネ・イスラエルのなかで果たした役割は、それまで長い間、他地域のユダヤとの交流をもたなかったベネ・イスラエルの孤立状態を終わらせたことにあった。このように彼女の歴史認識においては、ラハビの到来以前も、ベネ・イスラエルの人々がユダヤとしての信仰や慣習（それが現地化されたかたちであったとしても）を途切れることなく継承していたことが強調されている。こうした叙述は、コミュニティの外部において、ベネ・イスラエル

---

9 このエッセーにおいては、1913 年の講演とは異なり、レベッカはディヴィド・ラハビの到来の時期を 18 世紀としている[Reuben 1919–20: xiii]。

10 レベッカは、ベネ・イスラエルの間に広くみられるエリヤ崇拝に関しても、ディヴィド・ラハビの改革のひとつとして捉えており、それまでに彼らの間にみられた在地の（非ユダヤの）聖者への崇拝をやめさせるために、ラハビがエリヤ崇拝を打ち立てたとの見方を示している[Reuben 1919–20: xv]。エリヤ信仰については、[井坂 2021]末尾の注 10 を参照。

の起源をめぐって以下にみるような様々な解釈が存在しており、レベッカがコミュニティの歴史を語るにあたって、それらを意識せざるをえなかったことを表している。

ここで再び、『ボンベイのベネ・イスラエル』の内容に戻ろう。レベッカがベネ・イスラエルの起源をめぐる諸説に反発する様子は、この講演のいたるところに現れている。ここでレベッカは、自らが支持しない説をひとつひとつ取り上げ、それぞれに対して様々な論理を駆使しながら反論を試みている。まずベネ・イスラエルの祖先を、ディヴィド・ラハビのもとでユダヤに改宗した、インド在来のコミュニティに属する人々として捉える説については、もしベネ・イスラエルが改宗者であるならば、なぜ彼らは「黒いユダヤ」と呼ばれていないのかと問いかける[Reuben 1913: 5]。すなわち、もしコーチン・ユダヤが彼らを改宗したのであれば、ベネ・イスラエルに属する人々は全て「黒いユダヤ」と呼ばれるはずであり、実態としてそのように呼ばれていない以上、ベネ・イスラエルの祖先は改宗者ではありえない、というわけである。

次にレベッカは、ベネ・イスラエルを、インドに到来したユダヤ男性と現地の非ユダヤ女性との婚姻から生じたコミュニティとみなす見方を取り上げ、ベネ・イスラエルの女性が食や祝祭に関するユダヤの慣習を遵守する様子を根拠として、この可能性を否定する。さらに、旧約聖書の物語のなかで、ヤコブが妻ラケルのもつ偶像のために困難な状況におかれたり、ソロモン王が彼の妻たちの異教の神々を認めざるをえなかったりしたことに言及しながら、それに対してベネ・イスラエルの家庭には他宗教の神々が入り込んでいないとして、彼らの祖先のなかに非ユダヤ女性が含まれている可能性を否定する。さらに、ベネ・イスラエルの女性たちが、インドの女性たちが行っているように幸運の印として「額に赤い粉で点をつける」習慣をもたないことをも指摘している[Reuben 1913: 6]。

以上のほかに、レベッカは、ヒンドゥーのカースト制度の存在が、インドにおいて異なるコミュニティ間の婚姻を困難にしているとの観点からも、祖先の代でのユダヤ男性と現地の非ユダヤ女性との婚姻の可能性を否定する[Reuben 1913: 7]。同様に、ベネ・イスラエルが身体的特徴においてインドの人々に似ている（したがって彼らは混血の祖先をもつ）との意見に対しても、慣習や身体的特徴が、移住先の住民のものと似通ってくるのは、世界中のユダヤにみられることであると主張する。なお、これらの反論の内容には、後述するH・S・ケーヒームカルの歴史叙述と重なる部分も多く、レベッカの講演の内容は、当時、ベネ・イスラエル知識人たちの間で交わされていた議論を随所に取り入れたものと考えることができるだろう。しかしながら、この講演や『ベネ・イスラエル年報』におけるレベッカの語りからは、彼女が周囲の人々の議論を単に並べかえたのではなく、自らの経験も踏まえつつ、ベネ・イスラエルの出自の「正統性」を、コミュニティの外部の人々にいかに説得的に伝えるかを模索した様子がうかがえる。

講演の後半部では、イギリス植民地期におけるコミュニティの状況が語られる。レベ

ッカはこの時代を「イギリス化（Anglicisation）」の時代と評し、イギリスの影響や、ヨーロッパのユダヤと一体化したいとの願望を背景に、ベネ・イスラエルの間で宗教や教育面での改革が進んでいることを指摘している[Reuben 1913: 14]。さらに講演の終わり近くでは、インドにおいては反ユダヤ主義が存在しなかったとの歴史認識が示されている。この認識はベネ・イスラエルの知識人たちの間で広く表明されていたものであり、現在においても頻繁に耳にする言説である。レベッカはインドにおける反ユダヤ主義不在の背景として、(1) ベネ・イスラエルは人数が少なく、しかも貧しく人目につかなかったこと、(2) インドには様々な異なる集団が存在すること、(3) ヒンドゥー教が「世界の宗教のなかで最も寛容な宗教のひとつ」であること、の 3 点を挙げている[Reuben 1913: 17]。また、ベネ・イスラエルとイギリス政府との関係については、イギリス政府は、貧しく小さなコミュニティには特別な関心は抱いていないと述べる一方で、ベネ・イスラエルがその独特の立場ゆえに、教育や公職の一部でヨーロッパ人と同じ扱いを受けるなど、他のインド人とは異なる状況におかれていることも指摘している。

レベッカは最後に、ベネ・イスラエルの間では英語教育が重視され、女性も含めて高い教育水準を示していることに触れたうえで、こうした教育の進展や「イギリス化」を評価しつつも、そのなかで「ユダヤの理想への無関心や、そこからの離反」が顕著になりつつあることへの懸念を示している[Reuben 1913: 18–20]。このようにユダヤとしての生き方を重視するレベッカの姿勢は、以下にみるように、インド帰国後の彼女の教育・社会活動にも様々に反映されることになる。

3. レベッカ・ルーベンとシオニストたち

前述のように、イギリスから戻ったレベッカは、ベネ・イスラエル・コミュニティのための活動に深く関わっていくことになる。彼女のなかでユダヤとしてのアイデンティティが強く意識されていたことは前述の講演からも明らかだが、彼女のユダヤ意識にさらに影響を与えることになったのが、1920 年代以降のインドにおけるベネ・イスラエルとシオニストたちとの交流であった。

第一次世界大戦中の 1917 年 11 月、イギリスの外相アーサー・バルフォアは、ユダヤの名門ロスチャイルド家のライオネル・ウォルター・ロスチャイルドに書簡を送り、イギリス政府がパレスチナにおけるユダヤのための「ナショナル・ホーム（民族的郷土）」の建設構想を支持することを明言し、その旨をシオニスト連盟に伝えるように依頼する（「バルフォア宣言」）。その後、第一次世界大戦が終わり、パレスチナがイギリス委任統治下に入ると、ヨーロッパのユダヤによるパレスチナ移住が進められることになり、欧米のシオニストたちは、ナショナル・ホーム建設に向けた資金集めや、この構想へのより広範な支持を集めることを目的として、世界各地のユダヤ・コミュニティや政治指導

者たちへの働きかけを始める。こうした流れのなかで、インドにおいても、海外からシオニスト使節が次々と訪れるようになる。

レベッカの住むボンベイでは、ベネ・イスラエルとバグダーディーの指導者たちが、1920 年にそれぞれベネ・イスラエル・シオニスト協会（Bene Israel Zionist Society）とボンベイ・シオニスト協会（Bombay Zionist Association）を設立している[Roland 2018: 150–152]。シオニスト組織からインドへ使節が派遣されるようになると、ボンベイにおいても彼らと在地のユダヤ・コミュニティ指導者たちとの交流が始まる。ベネ・イスラエル出身で、イギリスへの留学経験をもち、自らの属するコミュニティのための教育機関を運営する女性知識人レベッカ・ルーベンの存在は、これらのシオニストたちからしばしば注目を集めることになる。例えば、1921 年にロンドンの世界シオニスト機構（World Zionist Organisation）によってインドに派遣されたイスラエル・コーエン（Israel Cohen, 1879–1961）は、集会やイスラエル・スクール訪問を通じてレベッカと面会し、回顧録のなかで彼女を「ケンブリッジを卒業した、才能のある若いユダヤ女性」と評している[Cohen 1925: 258, 262][11]。

1936、1941 年にインドを訪問したポーランド出身でサンスクリット学者のイマヌエル・オルスヴァンゲル（Immanuel Olsvanger, 1888–1961）も、レベッカと交流のあったシオニストのひとりである。パレスチナのユダヤ機関・政治局（Jewish Agency, Political Department）の要請でインドを訪問したオルスヴァンゲルは、1936 年の滞在中に、それまで未刊行であった H・S・ケーヒームカル著『インドのベネ・イスラエルの歴史（The History of the Bene Israel of India）』（1897 年執筆）の手稿を入手し、テル・アヴィヴで刊行することになるのだが、そのきっかけとなったのがレベッカとの対話であったとの説もある [Benjamin 2000: 131][12]。のちにオルスヴァンゲルは、レベッカが 1947 年にパレスチナを訪問した際に、現地での彼女の案内役を務めている[Haeems 2000: 271]。

1939 年 3 月にパレスチナ創設基金（Keren Hayesod）によってテル・アヴィヴからインドに送られたイェフダ・ネディヴィ（Yehuda Nedivi）もまた、レベッカの教育活動を評価しており、彼女をパレスチナに派遣し、その教育制度を見学させることを報告書のなかで提案している[Ronald 2018: 205, 209]。これらのシオニストたちとの交流は、すでに留学を通じてイギリスのユダヤとのつながりをもっていたレベッカを、さらにグローバルなユダヤ知識人ネットワークにつないでいくことになった。このような交流が背景となり、1947 年に、彼女はエルサレムで開催された第一回ユダヤ教育世界大会にインド代

---

11 ただし、実際には前述のように、レベッカはケンブリッジでヘブライ語を学んでいるが、同校を卒業したわけではない。

12 H・S・ケーヒームカルの『インドのベネ・イスラエルの歴史』[Kehimkar 1937]における歴史叙述については、Numark [2001]による詳細な分析がある。ケーヒームカルの歴史叙述においても、ベネ・イスラエルの出自をいかに説得力をもつかたちで論じるかに関心が向けられていた。

表として招待され、初めてパレスチナの地を踏むことになる。

また、シオニストたちとの対話は、他のベネ・イスラエルのエリートたちの場合と同様に、「父祖の地」パレスチナに対するレベッカの関心を、それ以前にはなかったようなかたちで高めることになったと思われる。古代からインドに在住していたとされるベネ・イスラエルにとって、パレスチナにおける「ナショナル・ホーム」という構想は、当初は彼ら自身の問題というよりは、ヨーロッパ在住のユダヤに関わる問題として捉えられる傾向があった。1917 年 12 月にボンベイで開催された第一回ベネ・イスラエル会議では、その前月に出されたバルフォア宣言について議長が言及しているのだが、そこでは、「かの地に入植するという、西洋において我々と宗教を同じくする人々の多くがもつ望み」が実現されつつあるとの見方が示されている[Moses 1918: 36]。ここからは、バルフォア宣言がヨーロッパのユダヤの問題として捉えられ、インドのベネ・イスラエルに直接関わる問題としては考えられていなかったことがうかがえる。

しかし上記のように 1920 年代以降、海外からシオニスト使節が次々と来訪し、集会や個人的な接触を通じてパレスチナ建設への支持を呼びかけたり、パレスチナのユダヤ入植地についての情報を伝えるようになると、ベネ・イスラエル・エリートの一部では、「父祖の地」パレスチナの存在が徐々に意識されるようになる。彼らはシオニスト使節との対話のなかで、ベネ・イスラエルが果たしてパレスチナに受け入れられるのかどうかについて、繰り返し問いかけている。彼らはインド国内において、他のユダヤ・コミュニティ、とりわけバグダーディー・ユダヤから差別的対応を受けた経験をもち、ユダヤのなかでの出自、階級や肌の色による差別の可能性を明らかに警戒していた。パレスチナ建設への支援、なかでも資金面での支援を呼びかけるシオニストたちに対して、ベネ・イスラエルのエリートたちが、パレスチナ構想が彼ら自身に関わりのあるものであるのかどうかを確認しようとしたのは自然な流れであったといえよう。これに対してシオニスト使節たちが、ベネ・イスラエルもパレスチナで受け入れられる旨の返答を繰り返していたことは、ベネ・イスラエル・エリートの間では、自らのユダヤとしての「正統性」が承認されたことを意味するものとして受けとめられた[井坂 2021]。

以上のようなシオニストたちとの交流の影響に加えて、1930 年代から 40 年代にかけて、ナチ勢力からの迫害を逃れて、ヨーロッパのユダヤがインドに次々に来訪していたという状況も、パレスチナに対する彼らの関心を促す要因となっていた可能性がある。1934 年にはボンベイ在住のユダヤ、とりわけヨーロッパ出身のユダヤが中心となり、これらの難民を支援するためのユダヤ救済協会（Jewish Relief Association）が設立されている[Roland 2018: 177; Weil 1999: 71]。第二次世界大戦時には、ベネ・イスラエルやバグダーディーの指導者たちが、コミュニティの違いを超えて、イギリスへの戦争協力を双方のコミュニティの人々に呼びかける動きも起きている[Roland 2018: 214–215]。

このように戦間期から第二次世界大戦期にかけて、シオニストたちの活動や世界情勢

の変化が、ベネ・イスラエルの間に徐々にパレスチナへの意識を広めていったなかで、レベッカもまた、パレスチナにおけるユダヤのナショナル・ホーム建設への関心を深めていったものと思われる。オルスヴァンゲルが 1941 年にインドを再訪した際に、彼の提案のもとでベネ・イスラエルの若者をパレスチナ入植地に送るための開拓者（halutz）委員会が設立されると、レベッカはこの委員会に委員のひとりとして加わっている[Roland 2018: 232]。

当時、インドの民族運動で中心的な役割を担っていた指導者たちの間からは、ネルーをはじめ、ユダヤのパレスチナ移住に対する批判的な見解や、アラブ側の立場への共感がしばしば表明されていた。ムスリム連盟の指導者たちも、パレスチナにおけるユダヤのナショナル・ホーム建設の構想への反対を繰り返し表明している[井坂　2021: 164, 167–168]。そうした国内状況のなかで、しかしながらレベッカは、シオニストたちとの交流や彼らのもたらす情報、ユダヤ教や旧約聖書に関する自らの理解などをもとに、パレスチナへの関心を深め、同地でのユダヤ入植地建設についてのイメージを膨らませていったものと思われる。そのことは、以下にみるように、1947 年のパレスチナ訪問時に彼女が表したユダヤ入植地に対する楽観的な見方へとつながっていった。

4. パレスチナ訪問（1947 年）とイスラエルの建国宣言（1948 年）

第二次世界大戦終了から 2 年近くが過ぎた 1947 年 7 月、レベッカはエルサレムで開催された第一回ユダヤ教育世界大会にインド代表として招待され、パレスチナの地を初めて踏む。滞在期間は 1947 年 7 月 23 日から 9 月 25 日までの約 2 か月間に及んだ。この間、インドに残る父親に頻繁に書簡を送り、現地での自らの活動や心情について語っている。そこには、パレスチナと自分とのつながりを再認識する様子や、同地におけるユダヤ入植地の状況に深い感銘を受けているさまがありありと現れている。

テル・アヴィヴに到着した翌日の 1947 年 7 月 24 日に書かれた書簡では、レベッカはパレスチナ到着時の「ぞくぞくする経験」を感慨をもって振り返っている。また、上空からみたときの「吹きさらしで、むきだしで、木々もなく、ところどころに小屋のかたまりがいくつかある他には人のいない」トランスヨルダンと、耕地、果樹園、庭、森林、入植地の広がるパレスチナとを比較し、後者を「驚くべきユダヤの勇気、決意、自国への強い愛」と結びつけている[Reuben 2000c: 247–248]。レベッカはこのように、到着直後から、自らとパレスチナとの深いつながりを確認し、ユダヤ入植地に対する高い評価を表している。

第一回ユダヤ教育世界大会の場を通じて、世界各地から集まったユダヤ知識人たちと交流したレベッカは、そのときどきの興奮についても父親への手紙に書き綴っている。大会初日、彼女はインドのユダヤ代表としてヘブライ語によるスピーチに臨む。そのな

かで、自らが遠くインドからやってきたこと、インドのユダヤは同地の 4 億の人口のなかで 25,000 人にすぎないこと、自らは「古代の民、ベネ・イスラエルの娘」であることなどを説明している。また、パレスチナに対する長年の思いについて、「子どものころから、私は自分の父祖の地を見たいという大きな望みに取り憑かれていました」と語る。そのうえで、エルサレムという「聖なる都市、王たちや預言者たちの都市、そしてそれ以上に私たちや私たちの息子たち、娘たち、そして未来の世代の人々の都市」へやってきたことへの喜びを表した[Reuben 2000c: 251]。

大会の前後においても、レベッカは、ユダヤ入植地や、図書館、病院、教育施設、博物館、シナゴーグ、ユダヤの聖地などを訪問したり、オルスヴァンゲルをはじめとする現地の知識人たちと交流するなど、活発な活動を展開している。以前にインドで交流したアレクサンデル・ゴールドステイン（Alexander Goldstein, 1884–1949, 1927 年にパレスチナ建設基金がインドに派遣）やイェフダ・ネディヴィ（前述）とも旧交を温めている[Reuben 2000c: 260, 267; Roland 2018: 156]。彼女がそのサリー姿とともに、対話を通じて人々をひきつけていた様子を、オルスヴァンゲルは彼女の父親あての書簡のなかで記している。彼によれば、レベッカはインドやベネ・イスラエルに関して繰り返される質問のあれこれに、辛抱強く答え続けていた[Haeems 2000: 271]。

彼女のパレスチナ滞在期間中に、インドとパキスタンがイギリスから独立するのだが、この期間に父親にあてて送られた書簡には、印パ独立、あるいは印パ分離についての言及は全く含まれていない。ベネ・イスラエルに属するエリートたちの間では、20 世紀前半のインド・ナショナリズムの台頭について、異なる反応や関わり方がみられるのだが、管見の限りでは、レベッカの場合には、ガーンディーらの指導下で展開される民族運動から明らかに距離をおいており、運動に関して積極的に自らの見解を表すこともしていない。ただし、独立に伴ってインドとパキスタンが分離することについては、批判を口にしていたようである。知人でありジャーナリストであった I・A・エゼキエルによれば、独立直前にレベッカは印パ分離に関して、「それは何の解決にもならず、ヒンドゥーとムスリムの双方にみじめさをもたらすだけでしょう」との意見を述べていた[Ezekiel 2000: 28]。また、彼が記すところによれば、レベッカは独立後のインドにおいて、マイノリティは自力でその立場を守ることができるとの見通しを示していた。インド独立前の段階では、レベッカは、イギリスの撤退やインド独立、あるいは印パ分離が、ベネ・イスラエル・コミュニティのおかれた状況を大きく変えるものになるとは捉えていなかった可能性もある。

前述のように、パレスチナ滞在中に書かれた書簡には、レベッカのユダヤ入植地に対する高い評価が随所に現れているのだが、そのなかには同地におけるユダヤ・アラブ間関係に対する楽観的な見方も含まれている。レベッカはあるとき、2 組のアラブ家族を訪問した際に、アラブとユダヤの合同キブツができる可能性はないかとオルスヴァンゲ

ルに尋ねている。また、ユダヤ教とイスラームは同じ原則をもち、教育を受けたユダヤとアラブには共通する部分が多いはずであるとの自らの見解を、同じくオルスヴァンゲルに対して述べている[Reuben 2000c: 259][13]。別の箇所で、彼女は、新しいユダヤ入植地の開拓現場を見学した際に、数名のアラブがやってきて親し気に話をしていた様子や、敷地内にある放置された状態のアラブの墓地を、ユダヤ入植者たちが注意深く周りを壁で囲い、かき乱すことのないように配慮していた様子を書簡に記している[Reuben 2000c: 263]。レベッカはこれらの経験を、ユダヤ・アラブの共存に関する自らの見通しを裏づける事例として位置づけていたものと思われる。

パレスチナから帰国したレベッカは、その翌月にボンベイで講演を行い、パレスチナ滞在経験を語っている。いとこのジェルーシャ・ジラドがレベッカの父親に出した手紙によれば、この講演はベネ・イスラエル・コミュニティの成員全てがやってきたのではないかと思われるほどの盛況ぶりであった[Haeems 2000: 272]。ジラドはレベッカの講演から、彼女が「磁石によるかのようにパレスチナに魅了されて」いると感じ、「我々は彼女を失うかもしれない」（レベッカがパレスチナに移住するかもしれない）との危惧をもったことを書簡のなかで記している。この講演において、レベッカは同地では人種に基づく差別が存在しないことを経験談とともに語るのだが[Chincholkar 2000: 121]、その背景には、ベネ・イスラエルの間で、依然としてユダヤ内部での差別を懸念し、パレスチナにおける彼らの位置づけを不安視する見解が存在していたことがあったと思われる。

パレスチナのユダヤ入植地に対するレベッカの高い評価や、その将来に対する楽観的な見解は、その約 1 年後の 1948 年 11 月、『インドとイスラエル』誌[14]に掲載された彼女のエッセーからも確認できる[Reuben 2002]。このエッセーでレベッカは、同年 5 月にイスラエル建国宣言の知らせをラジオで聞いたときの心境を振り返っている。そこでは新国家イスラエルにおけるユダヤとアラブの関係が、旧約聖書に登場する双子の兄弟ヤコブとエサウの関係に重ねられている。長年の別離ののちにヤコブとエサウが再会し、互いに喜びの涙を流したように、ユダヤとアラブも「二人の長く離れ離れになっていた兄弟」として出会い、助け合いながらともに暮らすというのが、レベッカの思い描いていたイスラエル社会像であった。彼女はこのなかで、ユダヤ入植者たちを、荒れ果てた状態におかれた広大な土地に、「自らの知識と技術、土地に対する愛と献身的な労働力」や「自らの物質的・精神的資源の全て」をもたらす存在として描いている[Reuben 2002: 253]。

イスラエルの将来に対するこのような見通しは、新国家イスラエルが苦難に満ちた経

---

13 レベッカの書簡によれば、こうしたレベッカの見解に対してオルスヴァンゲルは、ユダヤ・アラブ間の違いの大きさを強調し、教育を受けたユダヤとムスリムの共通点は、前者がシナゴーグに行かず、後者がモスクに行かないことだけであるとの返答をしている[Reuben 2000c: 259]。

14 『インドとイスラエル』誌は 1948 年 7 月にボンベイで F・W・ポーラックによって創刊され、彼が 1953 年にイスラエルに戻るまで継続している[Roland 2018: 243] 。

験を積んできたユダヤたちによってつくられたがゆえに「正義と平和を守る」に違いない、との彼女の確信に基づいていた。レベッカは同じエッセーのなかで、以下のように語っている。

> 古代に起源をもつ人々は、東洋の知恵の全てと西洋の活力とともに、その古代の遺産へと戻ってきた。ここにある小世界には、世界の数多くの民族が代表されている。ここには人が人に対して加えうるあらゆる屈辱やあらゆる不正を被った人々が集まっている。その苦しみの遺産は、古代の預言者たちによって大昔に彼らのなかに埋め込まれた、社会正義への激しい欲求を、さらに強めることとなった。それゆえにこそ、イスラエルという新生国家が正義と平和を守ることを、私たちは期待している。 [Reuben 2002: 253]

このようなレベッカの信念は、インドにおいてイスラエルに対する批判的な言説が現れてきた際に、イスラエルを強く弁護する立場を彼女に取らせることになった。この様子が明確に現れているのが、次に取り上げる 1953 年に当時のインド首相ジャワーハルラール・ネルーにあてて彼女が記した公開書簡である。

5. ネルーへの手紙

レベッカのネルーあて公開書簡は、1953 年 5 月 20 日付で書かれ、同年 6 月に『インドとイスラエル』誌・第 5 巻第 12 号に掲載された。まず、この書簡の背景を理解するために、当時のインド・イスラエル間の関係について簡単に触れておきたい。

1948 年 5 月のイスラエル建国宣言以降、インド政府は、国内のムスリム世論やアラブ諸国への配慮から、イスラエルとの外交関係について慎重な姿勢を取り続ける。1950 年にイスラエルの独立を承認するものの、その後も実質的な外交関係の開始は先送りされた。インドはイスラエルに代表を送らず、イスラエルの領事館がボンベイにおかれるのみという状況が、その後 1992 年まで続くことになる[Blarel 2015; Kumaraswamy 2010]。インド政府がこのような政策をとった背景には、イスラエル政策をめぐりアラブ諸国の反発を招いた場合に、それが貿易（とりわけ石油輸入）に与える影響を懸念していたことや、カシミールをめぐる印パ対立において、アラブ諸国がパキスタン支持に回るのを恐れていたことがあった。さらに、インドが第三世界の諸国家に対する指導的立場に立つという観点からも、アラブ諸国との関係は重視されていた[Roland 2018: 244]。

インド・イスラエル政府間の関係がこのような推移を辿るなかで、1950 年代以降、インド国内のユダヤによるイスラエル移住の流れが本格化する。1950 年 9 月にはボンベイにユダヤ機関移民局が設立され、1952 年末までにはすでに約 3,000 人のインド・ユダヤ

がイスラエルへ移住している[Roland 2018: 247–248]。移住の背景としては、ユダヤとしての意識、経済的な理由、あるいは独立後のインドへの不安など、様々な要因が考えうるのだが、こうして移住した人々のなかから、まもなくイスラエルでの経験や生活についての不満を表明したり、インドへの帰還を求める人々が現れるようになる。この状況を受けて、1953 年にインドの連邦議会上院において、ある議員から、帰還の原因のひとつはイスラエルにおける人種差別であるのかという質問が出される。このとき、外務大臣政務官はそれを認める発言をするのだが、レベッカが公開書簡を執筆するきっかけとなったのは、まさにこの政務官の短い発言であった[Reuben 2000d: 275]。レベッカはこのときの質疑応答を取り上げ、議会でのやりとりとは裏腹に、イスラエルには人種差別がないと主張するために、『インドとイスラエル』誌にインド首相兼外相であるネルーあての公開書簡を掲載したのである。

同書簡のなかでレベッカは、まず彼女の属するベネ・イスラエル・コミュニティについて、「この広大でもてなしの心をもつ土地に 50 世代から 60 世代にわたり在住している」小さなユダヤ・コミュニティとして説明している。ここで「広大でもてなしの心をもつ土地」が指すのはインドのことである。そのうえで、「我々はインド人民であり、自分たちをマハーラーシュトラ人と呼び、マラーターの力強い言葉を話すことに誇りをもっています」と語る[Reuben 2000d: 273]。ここではベネ・イスラエルがインドという国家、マハーラーシュトラという地域、マラーティー語という言語とそれぞれ深いつながりをもつことが示されている。さらにレベッカは、ベネ・イスラエルが、「何百年にも渡る幸せな年月」の間、彼らの故郷であり続けたインドに対して、心からの愛と忠誠心をもつことを強調する。

そのうえで、ベネ・イスラエルのなかで、インドへの帰属意識とユダヤとしての意識とがどのような関係にあるのかを、以下のように説明している。

> 我々はインド人ですが、同時にユダヤでもあります。そしてユダヤとして、我々の集団の精神的な遺産や、その遺産の源泉であるイスラエルの土地に対して、同じように深い愛と忠誠心をもっています。(中略) 我々はそれゆえにふたつの忠誠心をもつ人々です。しかしそれは分裂した忠誠心ではありません。我々はインドとイスラエルによって支えられ、育てられてきました。そして我々はその両方に対して深い感謝の気持ちをもっています。 [Reuben 2000d: 273–274]

ここまで述べたうえで、レベッカは「ふたつの忠誠心」という考えに一部の人々が反発する可能性を想像し、世界各地に移住したインド出身者たちに注意を向ける。彼女は、こうしたインド出身者たちのインドへの忠誠心が、移住先の土地への忠誠心を妨げるわけでではないことを例として挙げながら、ベネ・イスラエルの帰属意識のあり方を説明

しようと試みている。

またレベッカは、このようにインド、イスラエル双方と深いつながりをもつベネ・イスラエルにとって、インド・イスラエル間の関係の悪化は、大きな苦しみをもたらすものであると述べる。彼女はここでようやく、イスラエルからインドへの帰還者たちをめぐる議会でのやりとりに言及し、イスラエルにおいて人種差別が存在することを認めたかのような外務大臣政務官の発言は、情報として誤っているばかりか、「友好的な国に対して公正さを欠く」ものであると断じている[Reuben 2000d: 275]。

レベッカはこれに続いて、イスラエルにおいて人種差別が存在しないことを、強い言葉を用いながら畳みかけるように主張する。例えばレベッカは、自分自身がイスラエルからインドに戻った人々と日常的に接触していると述べ、彼らは気候や経済、環境面での様々な困難について語るが、差別について口にする者はいないと述べる [Reuben 2000d: 275–276][15]。また、イスラエルには多様な民族が混じりあっており、そのような場所で差別は起こりえないとの見解や、差別や人種的偏見は、ユダヤ教の精神や、イスラエルという国家を生み出すもととなった理念に反するとの見解も示している。レベッカは、イスラエルから戻った人々の大多数が再びイスラエルに戻りたがっているとも述べながら、同地における人種差別の不在を繰り返し主張する[Reuben 2000d: 276–277]。そこでは、彼女がパレスチナ（イスラエル）訪問時に見た光景についても触れられている。それは、「肌の黒いイエメン出身の少年と、金髪で青い目をしたドイツ出身の少年が、子ども村で宗教儀礼を一緒に執り行っている」という光景であった。レベッカはネルーに、エリザベス 2 世の戴冠式のためにイギリスを訪問する帰りに、イスラエルにも立ち寄り、自らの目で判断するようにとまで述べている。こうしてイスラエルに対するインド政府の理解を求めたうえで、レベッカは、「インドとイスラエルという双方の国の息子、娘」であるベネ・イスラエルにとって、ふたつの国が友好関係を築くことは、「我々の偉大なるガンガー川とヤムナー川が一緒に流れるのと同じように美しいものとなるだろう」と訴えている[Reuben 2000d: 278]。

以上のように強い口調で政府関係者の発言を批判し、イスラエルを弁護したレベッカだが、書簡の末尾では、この書簡がどのような反応を招くのかについての不安感をものぞかせている。そこからは、レベッカが、独立後のインド社会に重要な変化が起きているとの認識をもっていたことが垣間見える。彼女は以下のように書簡を締めくくっている。

多くの国々において、ひとりのユダヤの無分別な言動が、集団全体に疑惑をもたら

[15] 当時、インドからイスラエルに移住したユダヤの経験を記した記録のなかには、レベッカの理解とは明らかに異なる状況も描かれている。詳細については、Singh [2009], Shazor [2018]などを参照。

したり、ときには破滅をもたらすこともありました。インドではそうしたことは一度もありませんでした。しかし時代は変わり、それに伴って状況も変わります。ですから最後にお断りしたいのですが、私は自分自身の責任で、私自身の名前でこの手紙を書いています。それは、もし何らかの非難が生じた場合でも、それが集団にではなく個人に対して行われるようにとの思いからです。 [Reuben 2000d: 278]

すなわち、ここでレベッカは、この書簡がインド社会のなかからの反発を招いた場合、それがベネ・イスラエル・コミュニティ全体、あるいはインドのユダヤ・コミュニティ全体への批判や攻撃につながることを恐れ、書簡の内容に対する責任があくまで個人にあることを強調している。ここには、かつて自らが主張していたのと同様に、インドにおいてはユダヤへの迫害が起きたことがないとの歴史認識を維持しつつも、印パ分離以降のインド社会の変化、及びユダヤを取り巻く状況の変化を、レベッカが感じていた様子が現れている。

印パ分離では、ヒンドゥーの多住地域をインド、ムスリムの多住地域をパキスタンとするという原則のもとに国境線が引かれ、ヒンドゥーとムスリム、あるいはシクとムスリムとの間の暴動や、大規模な難民が生じた。それらの惨事に加えて、独立後の印パ間の対立は、ヒンドゥーの政治勢力の一部が、インド国内のムスリムとパキスタンとの結びつきを疑い、彼らのインドへの忠誠心をとりわけ求めるという状況をつくり出していた。レベッカが「ふたつの忠誠心」という言葉を用いた際に、それが「分裂した忠誠心」ではないことをあわせて強調した背景には、こうした社会状況があったと考えられる。ベネ・イスラエルにとって、イスラエルというユダヤのための国家が成立したことは、「父祖の地」に移住するという選択肢を実現可能なものとして意識させるとともに、インドにおける自らの帰属意識のあり方や、自らの「忠誠心」のあり方を、国民国家の枠組みのなかでいかに提示すべきかという問いをも突きつけることになったのである。

結びにかえて

本稿はレベッカ・ルーベンの生涯とその著述を通して、彼女が同時期の政治・社会変動のなかで、自らの属するベネ・イスラエル・コミュニティの歴史や現況、彼らとインド、パレスチナ/イスラエルとの関係をどのように捉えていたのを通時的に考察した。植民地期から独立後にかけて、ベネ・イスラエルの知識人、教育者として活躍したレベッカは、ベネ・イスラエルがどのようなコミュニティであるのか、とりわけ諸説が存在していたベネ・イスラエルの起源について、コミュニティ内外の人々に自らの考える「正しい」解釈を伝えることに大きな関心を示していた。そこには外部に対してベネ・イスラエルのユダヤとしての正統性を主張し、コミュニティ内に対しては「イギリス化」の

なかにあってもユダヤとしての生き方を維持することを求めるレベッカの姿勢が現れている。

1920年代以降にインドを訪れたシオニストたちとの交流は、彼女に「父祖の地」としてのパレスチナの存在を意識させ、ともすると楽観的にもみえるユダヤ国家の将来像を育ませていった。1947年のパレスチナ訪問や、1948年のイスラエルの建国宣言の際のレベッカの議論には、ユダヤ・アラブが協力して社会を発展させる姿を思い描き、ユダヤ内部の人種差別の存在を否定しながら、パレスチナ/イスラエルにおけるユダヤのナショナル・ホーム建設に大きな期待を寄せる様子が浮かび上がっている。

このように「父祖の地」イスラエルに対する強固な信念をもちつつも、自らは「母なる地」であるインドに留まったレベッカは、インド国内でイスラエルを擁護する立場を取りつつ、新たな国民国家の枠組みのなかで、ベネ・イスラエルとインドとの関係を改めて規定しようと試みている。そこでは、それまでもベネ・イスラエルの間でしばしば用いられていたような、イスラエルとインドをそれぞれ父と母になぞらえ、ベネ・イスラエルの人々を双方の子どもとして表す言説とともに、それぞれの国への「忠誠心」が主張され、さらにそのふたつの忠誠心が矛盾しないことが強調されることになる。

レベッカと同時代を生きたベネ・イスラエル・エリートのなかには、イスラエルの状況について、とりわけ人種差別の問題に関して、レベッカとは大きく異なる見方を表していた人々も存在した。また、ベネ・イスラエルに属する人々のインド・ナショナリズムとの関わり方、インド・ナショナリズムへの評価も、必ずしも一枚岩ではなかった。今回はレベッカの生涯と著作のみを取り上げたが、今後はこの時代のベネ・イスラエル知識人のうち、レベッカとは異なる立場を取っていた人々の事例を取り上げることで、彼女の認識をベネ・イスラエル・コミュニティのなかでどのように位置づけるべきかをより明確にすることができるだろう。

最後に、今回検討したレベッカの著述のなかでは、女性教育の重要性を説く議論はみられるものの、ベネ・イスラエル・コミュニティ内部のジェンダー規範を批判的に検討したり、ジェンダーに基づく差別、排除に関する明確な異議申し立てを行っているものはみられなかった。レベッカがイスラエル・スクールというコミュニティのための共学校の校長という立場にあったことを考えると、コミュニティ内で明らかに賛否が分かれるような議論を公の場で発信することを避けていた可能性もある。いずれにしても彼女のジェンダーに関する見解については、さらなる検討が必要であろう。レベッカより後の世代のベネ・イスラエル女性知識人たちのなかには、ベネ・イスラエルというコミュニティに属し、かつそのコミュニティの女性であることがどのような意味をもつのかを、文学作品などを通じて積極的に論じる人々も現れている。ベネ・イスラエル知識人たちのジェンダーをめぐる議論については、別稿で改めて論じることとしたい。

参照文献

Benjamin, Joshua. 2000. 'My Reminiscences of Rebecca Reuben', in Nina Haeems (ed.), *Rebecca Reuben: Scholar, Educationist, Community Leader 1889–1957*. Mumbai: Vacha Trust.

Bhatti, Anil and Johannes H. Voigt (eds.). 1999. *Jewish Exile in India 1933–1945*. New Delhi: Manohar.

Blarel, Nicolas. 2015. *The Evolution of India's Israel Policy: Continuity, Change, and Compromise since 1922*. New Delhi: Oxford University Press.

Census of India. 2011. Census Digital Library. 'C-01 Appendix: Details of Religious Community Shown under "Other Religions and Persuasions" in Main Table'. https://censusindia.gov.in/nada/index.php/catalog/11398（2022 年 12 月 20 日閲覧）

Chincholkar, Abraham M. 2000. 'Some Memories of Miss R. Reuben', in Nina Haeems (ed.), *Rebecca Reuben*.

Cohen, Israel. 1925. *The Journal of a Jewish Traveller*. London: John Lane The Bodley Head.

Corley, Elizabeth. 2002. 'Huzurpaga—A Unique Institution', in Nina Haeems (ed.), *Jewish, Indian and Women: Stories from the Bene Israel Community.* Mumbai: Vacha Trust.

Divekar, Uziel Solomon. 2014. 'Haeem Samuel Kehimkar and the Israelite School', in Nina Haeems and Alysha Haeems (eds.), *Indian Jewish Women: Stories from Bene Israel Life*. New Delhi: Mosaic Books.

Ezekiel, I.A. 2000. 'The First Bene Israel Graduate', in Nina Haeems (ed.), *Rebecca Reuben*.

Haeems, Nina (ed.). 2000. *Rebecca Reuben: Scholar, Educationist, Community Leader 1889–1957.* Mumbai: Vacha Trust.

Haeems, Nina (ed.). 2002. *Jewish, Indian and Women: Stories from the Bene Israel Community.* Mumbai: Vacha Trust.

Haeems, Nina and Alysha Haeems (eds.). 2014. *Indian Jewish Women: Stories from Bene Israel Life*. New Delhi: Mosaic Books.

Isenberg, Shirley Berry. 1988. *India's Bene Israel: A Comprehensive Inquiry and Sourcebook.* Bombay: Popular Prakashan.

Israel, Sarah. 2000. 'My Amazing Aunt Dija', in Nina Haeems (ed.), *Rebecca Reuben*.

Jhirad, Abigail. 1990. *A Dream Realised: Biography of Dr. Jerusha J. Jhirad.* Bombay: ORT India.

Kehimkar, Haeem Samuel. 1937. *The History of the Bene Israel of India*. Tel-Aviv: Dayag Press.

Kumaraswamy, P.R. 2010. *India's Israel Policy.* New York: Columbia University Press.

Moses, Solomon (ed.). 1918. *Report of the 1st Bene-Israel Conference 1917*. Bombay: Purandare Company Printing Press.

Numark, Mitch. 2001. 'Constructing a Jewish Nation in Colonial India: History, Narratives of

Discent, and the Vocabulary of Modernity', *Jewish Social Studies*, 7, 2, 89–113.

Numark, Mitch. 2012. 'Hebrew School in Nineteenth-Century Bombay: Protestant Missionaries, Cochin Jews, and the Hebraization of India's Bene Israel Community', *Modern Asian Studies*, 46, 6, 1764–1808.

Reuben, Rebecca. 1913. *The Bene Israel of Bombay.* Cambridge: The University Press.

Reuben, Rebecca (ed.). 1917. *The Bene-Israel Annual and Year Book, 1917–18*. Bombay: Bombay Vaibhav Press.

Reuben, Rebecca (ed.). 1918. *The Bene-Israel Annual and Year Book, 1918–19*. Bombay: Bombay Vaibhav Press.

Reuben, Rebecca (ed.). 1919–20. *The Bene-Israel Annual and Year Book, 1919–20*. Junagadh: State Printing Press.

Reuben, Rebecca. 2000a. 'Sir Elly Kadoorie School', in Nina Haeems (ed.), *Rebecca Reuben*.

Reuben, Rebecca. 2000b. 'A Tug of Wills', in Nina Haeems (ed.), *Rebecca Reuben.*

Reuben, Rebecca. 2000c. 'Letters from Eretz Israel', in Nina Haeems (ed.), *Rebecca Reuben.*

Reuben, Rebecca. 2000d. 'Colour Prejudice in Israel? Open Letter to India's Prime Minister', in Nina Haeems (ed.). *Rebecca Reuben.*

Reuben, Rebecca. 2002. 'On the Banks of the River Yabbok', in Nina Haeems (ed.), *Jewish, Indian and Women Stories*.

Risley H.H. and E.A. Gait. 1903. *Census of India, 1901. Volume I–A. India, Part II.-Tables.* Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing, India.

Robbins, Kenneth X. and Marvin Tokayer (eds.). 2013. *Western Jews in India: From the Fifteenth Century to the Present.* New Delhi: Manohar.

Roland, Joan G. 2018. *The Jewish Communities of India: Identity in a Colonial Era*. Second edition. Abingdon: Routledge.

Shazor, Ilana (ed.). 2018. *Mother India, Father Israel.* Or Akiva: Kammodan Mocadem Publishing.

Singh, Maina Chawla. 2009. *Being Indian, Being Israeli: Migration, Ethnicity, and Gender in the Jewish Homeland.* New Delhi: Manohar.

The Times of India. 18 June 1928, 24 February 1931.

University of Bombay, The Calendar for the Year 1906–1907. Vol. I. 1906. Bombay: The Government Central Press.

University of Bombay, The Calendar for the Year 1908–1909. Vol. I. 1908. Bombay: The Government Central Press.

University of Bombay, The Calendar for the Year 1910–1911. Vol. I. 1910. Bombay: The Government Central Press.

University of Bombay, The Calendar for the Year 1914. Vol. I. 1914. Bombay: The Government

Central Press.
Weil, Shalva (ed.). 1999. ‘From Persecution to Freedom: Central European Jewish Refugees and their Jewish Host Communities in India’, in Anil Bhatti and Johannes H. Voigt (eds.), *Jewish Exile in India 1933–1945*. New Delhi: Manohar.
Weil, Shalva (ed.). 2020. *The Jews of Goa.* Delhi: Primus Books.
井坂理穂. 2021. 「植民地期インドのユダヤ・コミュニティとシオニズム」『東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要 Odysseus』第 26 号, 157–174 頁.

付記

前号に掲載した拙稿[井坂 2021]のなかにいくつかの記載の誤りがあったことから、お詫びとともに以下に正誤表を付す。

160 頁 7 行目　（誤）前者 →（正）後者
160 頁 8 行目　（誤）後者 →（正）前者
160 頁 17 行目　（誤）メディガ →（正）マーディガ
164 頁 25–26 行目　（誤）Bene Israel Zionist Association →（正）Bene Israel Zionist Society
172 頁参照文献 Haeems, Nina (ed.). 2000. のタイトル中　（誤）*Educationalist* →（正）*Educationist*
173 頁参照文献　（誤）Rebecca, Rebecca (ed.). 1917. →（正）Reuben, Rebecca (ed.). 1917.